

システム理論と言説分析

——意味単位確定のできにくさをめぐって——

高橋 幸

I. はじめに

一見すると本書はテーマの多様性ゆえに、各章が独立した論文集であるという印象を与えるかもしれない。だが、同じ主題について違った面に注目しながら繰り返し論じているという著者の発言(佐藤[2008: 13])は事実である。同じ主題とは、<安定的な意味単位としての「行為」を基礎にした社会理論ではなく、「行為」であることと「その意味内容」とが後続するコミュニケーションによって事後的に決まるような「行為-コミュニケーション」に基づく社会システム理論の可能性>である。ルーマンのコミュニケーションシステム理論は現在、最も有効な社会理論であるとの立場から考察を深め、ルーマンが「システム」の定義を超越論的に持ち込んでいる点を指摘し、そこを解除した形での理論の再構成と、それに基づく具体的事象についての分析を行なっている。

本書は一貫して同じ問題をめぐって議論されているが、読者それぞれの関心に基づいた問題の立て方を可能にするものでもある。様々な思考を誘発するのは濃密な議論のもつ典型的な特徴であるが、さらに佐藤の場合は、行為-コミュニケーションの意味はそれ自体で確定されるのではなく、事後的なコミュニケーション接続によってしか特定されえないという事態を引き受けて、自身が何をどこまでどのように考えたのかについて丁寧に書いている。それゆえ、本書での思考展開を追うことができた読者の中には、なにか強烈に「手渡された」という感覚を

持った者も多いのではないだろうか。

その中でも本稿では、佐藤におけるシステム理論と言説分析の関係について主題的に論じていくことにしたい。佐藤はこれまでルーマンシステム理論の研究と平行して、言説分析についても論じてきた(『言説分析の可能性』[2006])。本書第8章の桜の論考は新書『桜が創った「日本」』[2005]で行なわれている言説分析につながるものである。ルーマン理論の再構成とそれを基盤とした具体的事象の分析が展開されている本書の最後に置かれたこの桜の論考、とくにその中の「睦む桜」の分析は、何か異質さを含んでいる。つまり、これまでの一般的な社会学的分析枠組では捉えにくい。佐藤におけるシステム理論の考察と言説分析の営みの二つを照らし合わせることで、佐藤が何を問題とし、どう解こうとしたのかが浮き彫りになってくるのであるが、それを通して、「睦む桜」が理解しやすくなれば、本稿は成功したといえるだろう。

II. 佐藤が問題にしていること

佐藤は「システムがある」というのはルーマンという個別的観察者が持ち込んだ超越論的定義であるという批判を行なっているが、この告発によって彼は何をしようとしているのか。それは、ルーマンが「システムはある」から出発して構想した社会システム理論を逆方向から構成しなおすということである。「システムがある」という定義なしで経験的にシステムを同定すること、またルーマンが用いた強い定義をは

ずしてみることで複数のシステム理論がありうるということを明示することを目指している。このような考察は、ルーマンの次のような言葉からすると、ひとつの適切な視座であるといえる。

我々がシステムと環境との区別に、したがってまた<システム>という形式に中心的位置を割り当てているのは確かである。しかしそれは、われわれが理論の一貫性を、すなわち多数の区別の連関を組織していくのはその位置からであるということにすぎない。……(中略)……また、「一貫性」とは十分な冗長性を確立するという他に他ならない。つまりは情報を節約しつつ使用するということなのである。(Luhmann[1997: 63=2009: 56])

ルーマンは、<システム/環境>という区別に基づくシステムの想定はひとつの出発点でしかなく、そこから出発して一貫性のある理論が完成したとき、「十分な冗長性が確立する *Herstellung ausreichender Redundanzen*」という。ここから、出発点である「システム」を疑い、ルーマンの言う「システム」を出発点とせずにルーマンの「システム理論」を構成しようとすることはルーマン理論の「再構成」という目的において的確な方法であるといえる。そこからコミュニケーションシステム理論を構成しなおすことができれば、そのときにこそルーマンのシステム理論は理論的に(一般理論として)完成したということができるからだ。

だが、「システムがある」ことによってコミュニケーションがあることが規定できるにもかかわらず、「システムがある」を棄却したとき、いかにしてコミュニケーションを特定することができるのだろうか。ルーマンが「システムがある」を超越論的に規定したのと同じように、

システム論を逆から解くときには今度は「コミュニケーションがある」を強く立てなければ、理論構成は出発できないのではないか。

本書第1、2章では、「システムがある」によってルーマンが何を言っているのかをひとつひとつ確認し、「システムがある」の経験的同定のできなさを指摘しているが、第3、4章でコミュニケーションについて詳細に論じているのは、佐藤がこの問題に気づき考えたからではないだろうか。では、佐藤はコミュニケーションをどのように考えたのかを見ていこう。

ルーマンは、コミュニケーションを情報、伝達、理解に区別した。これにより、後続する行為→コミュニケーション(Bと呼ぶ)によって前の行為→コミュニケーション(Aと呼ぶ)の意味が確定されるという事態の理論化が可能になっている。詳しく言えば、ルーマンが「われわれはコミュニケーションを、情報・伝達・理解という三つの構成要素からなる統一体として理解する」(Luhmann[1997: 72=2009: 67])とし、「コミュニケーションが三つの選択肢の総合、つまり情報、伝達および理解から成り立つ統一体として把握されることになると、コミュニケーションは、理解が成立したばあいに、またそうしたばあいにかぎって実現されるのである」(Luhmann[1984=1993: 230])としている。これを佐藤は「伝達/情報の区別が理解をきっかけに現実化する」(佐藤[2008: 230])と解釈している。このことを評者は、基本的には佐藤の解釈と同義だが、BがAを理解するとはAを文脈にして行為する(=Bが成立する)ことである、と解釈する。情報とは、端的に言ってどのような新しいことがらが言われたのかということであり、伝達とはそれをどのように(どの文脈にしたがって)解釈するのかということである。

このようなコミュニケーションについて、佐藤が問題としたのは次のことである。すなわち、ルーマン自身の情報/伝達/理解というコミュ

ニケーション構想にもかかわらず、ルーマンが「システムがある」ということを超越論的に立ててしまったために、コミュニケーション以前にすでにシステム(コミュニケーションの文脈)が確立されてしまっていること。そのため、Aにおける文脈とBにおける文脈とが異なっているにもかかわらず、同じものだとされているということ、である。「システムがある」と事前に立ててしまうと、Bにおける文脈は<Aにおける文脈とA自身を含んだものだ>と考えることを暗黙のうちに促してしまう。だが、もしかしたらAが契機となってまったく異なった文脈が開かれているのかもしれない。それを包含関係に回収してしまうことは、必要以上に強い同一性の規定をかけているものである、と佐藤は問題を提起している。

佐藤は、社会システム理論を再構成するために、社会システムを疑うところからはじめた。単純に逆から解こうとすると、社会システムの構成要素である行為—コミュニケーションを実体的に捉えることになってしまう恐れがあった。それを佐藤は、行為—コミュニケーションの事後成立性=他者依存性によって回避している。社会システム論を構想するときに、「社会システム」も「行為—コミュニケーション」も、双方ともを超越論的定義によって実体的に捉えることを避けようとするとき、コミュニケーションがそれ自体で確定的意味単位にならないということがいかに重要なテーマであるかが分かるだろう。

そして、佐藤によるシステム論のここへの敏感な反応は、彼の言説分析の営為とも呼応している。

III. 言説分析

佐藤が編者をつとめた『言説分析の可能性』(2006)^①より、佐藤の述べる言説分析とは何かということの評者なりにまとめよう。とくに、

佐藤の論文(序章)と、「はしがき」において「それ(序章)をもっと内在的に」(佐藤[2006: ii], ()内は引用者による)論じたものであるとされている遠藤知巳論文(第1章)を参考にする。

言説分析とは或る意味空間^②を探る営為であるが、ジャンル・時代区分、その分野において安定的に成立している意味単位に準拠することなく、或る意味空間を言説の揺らぎ(複数性)の中に見出していくことである。社会学に即していえば、あたかも或る範囲によって区切られる社会があるかのように想定することで(つまり社会の全体性を超越論的に指し示すことで)、言説の効果から社会を構成するが、次に、そこに滑り込ませていた社会の実体視を明らかにし、最終的に、言説分析と社会実在論をともに相打ちにすること、この営為が言説分析である(遠藤[2006: 45])。一定の事柄が反復的に言説化されることで言説空間は編成・変形されており、その空間の記述もまたその空間に送り返される(記述の出来事性)。

このような言説分析の社会学への適用によって、社会学における「社会」の在り方が変化している。いわゆる「社会」を想定するのではないかたちで社会学の可能性が見えてくる。いわゆる「社会」を想定しないとは、たとえば、我々が動かされてしまっている経験の諸相を掴もうというかたちで、我々を動かす何らかのものとして社会なるものが考えられ、探究が進められていくということなどが考えられる(もしそうなったとき、その探究が社会学というジャンルの枠内に収まるのかどうかは保証できない)。

以上のような言説分析は次に挙げる2つの特徴を持つ。1、ある意味的定在の意味を確定できる一定の単位(フーコーの「言表」の単位、知識社会学における「知識」、計量分析における「量的に測られる個物」、「データ」、「母集団」

という単位など)に依存しないことを基本的な要件とする(佐藤[2006: 7-8])。例えば社会学は、意味の単位を「社会」と「個人」に置く傾向が強くなるが、ここに落としていかないということだ。それゆえに、2、そこから外は(その言説の)意味構成に関係しないという境界(内と外を分ける境界線)が確定できない(佐藤[2006: 7-15])、言い換えれば全域が見渡せない(遠藤[2006: 46])。

1はコミュニケーションシステム理論における行為—コミュニケーションの事後成立性=他者依存性という論点と響き合っている。2によって、佐藤が全体社会システムで何を問題としているのかが、より分かりやすくなるだろう。言説分析とシステム理論は、単位をそれ自体において同定できない、それにもかかわらず、もしくはそうだからこそ、見渡せない「全域」や「全体性」が意識されてしまうような、そういった思想的運動としてあることが分かる。

IV. 桜をめぐる言説分析

では、佐藤による具体的な桜の言説分析を見ていこう。

新書『桜が創った「日本」』[2005]は、桜をめぐる発生している「起源と反起源の遠近法」(これは近代の時間と社会の理解がいやおうなく抱かせる視座である)の中にいながら、その言葉の運動を捉えようとした仕事である。佐藤によれば、連鎖的な桜語りは桜の無意味化と反意味化の反転を繰り返している。発話者自身もその空虚さに気づいているのだが、語りの欲望はその空虚さをも折り込み済みで発動され続けている、という。

連鎖的な桜語りは桜を言葉の堆積の中にうずもれさせ、言葉があるということと桜があるということが切り離せなくなるような事態をもたらしている。近代社会は「どれほどの実質的意味があるのかよく分からないが、かつその空

虚さをどこかで知っているのに、にもかかわらずコトバを迂回することなしには『現実』にたどり着けない」という回路に埋め込まれており、そこではコトバと現実とは不可分で、「コトバ/解釈の回路を経巡ることで私たちは「社会」に出会う(遠藤[2006: 31])。桜に関してそのままにこれと同じことが生じている。我々はもはや桜言説の回路にのってしか桜に出会えない。そしてその桜語りの回路というものを対象化しているとき、すなわち桜語りの回路があると考えられることは社会があることの近似である。あえて強めに分かりやすく言えば、桜の言説分析は社会を社会として強く立てない<社会>なるものの記述であるといえる。

佐藤は新書において、桜言説の磁場において支配的な意味文脈はナショナリズムの物語であるという点に切り込み、桜の均質的な花の咲き方や根付きのよさ、花をつけ枯れるまでのサイクルなどから、どのようにナショナリスティックな文脈とつながっていったのかを、解きほぐしている。

本書第8章の論考は、新書の最後の方に触れられていた桜のゼロ記号化や、桜を介した環境についての考察であり、新書で行なわれた言説分析の延長線上にある。佐藤は第8章で「眺める桜」や「睦む桜」という二様の桜を描写している。東京において「桜」はゼロ記号化(人工/自然の境界線をなしている)されているとし、京都においては「桜」が人間と向かい合うように咲いているため、人間と溶け合っている(人工/自然コードを宙吊りにしている)と記述する。同じ「桜」なるものが異なる二様のものとして記述されているところは、桜というものが確定的な意味単位になりえないことを遂行的に示しているということができる。とくに「睦む桜」においては観察者(当事者)である人間と桜とが区別しがたいという事態が生じているが、これは個人を強く立てない形で、<社会>

を記述する試みのひとつであると言うことができるだろう。

また、「睦む桜」は観察者である人間と融合するために<人間/桜>の区別が明確に立たず、観察しにくい。その観察しにくさを観察したときに、佐藤が持ったような「自分の立つ平面がぐねっと曲がってしまう感じ」(佐藤[2008: 385])が生じる。自明なものだと思っていた自分の存在の平面の「外」が暗に指し示されてしまい、自分の存在の平面が揺らぐからである。この「外」は観察できるものではない。内からは「外」との違いとして内を特定するということできないため、システムの内の同一性は不安定となる。言説分析の特徴の2つめである「全域」、「全体性」が見渡しがたいとはこのことを指す。

以上のように考えると、捉えにくかった「睦む桜」の話が、新しい社会記述の試みのひとつであると理解できるだろう。「睦む桜」はさらに、おそらく、佐藤が再構成した、システムの同一性を強く立てずに、それゆえ必ずしも再参入が生じるわけではない状態でのコミュニケー-

ション接続を考えるコミュニケーションシステム論につながっているのではないかと思われる。だが、これ以上は筆者の力量の問題からまだ明確には見通せていない。

V. おわりに

本稿は佐藤における言説分析とシステム論の関係を明らかにすることを目的として、『意味とシステム』を読み直したものである。佐藤は、個人と社会とを強い意味単位としないかたちで、いかに社会を記述し社会学ができるのかという課題に取り組んでいると解釈できる。ルーマンのシステム理論を再構成したコミュニケーションシステム論、それに基づいた具体的な桜の言説分析という仕事の手つきを通してそのことが明らかになった。いまだ解釈が確定していないルーマンの社会システム理論を根底的なレベルで捉え、分かりやすくモデル化して提示している本書は明確な一步を踏み出したものであり、それは我々に具体的な更なる歩みを促すものである。

註

1. 近年、社会学では「言説分析」という語彙は広く受け入れられ一種のモードになっているが、この現状に対し、『言説分析の可能性』(2006、佐藤俊樹・友枝敏雄(編)、東信堂)では言説分析という言葉の安易な用いられ方・氾濫に対する批判がなされた。言説分析とはその方法論(手続き)によって分析営為の正当性・科学的妥当性が確保されるような種類のものではない。したがって、彼らは繰り返し、言説分析とは何かと語ることはナンセンスであるということに注意を喚起し続けている。だが、言説分析という言葉のもとで何をしているのかを概観することは可能であるし、言説分析を受け入れた意味空間、そこでの概念布置や前提条件を考察することは妨げられないだろう。
2. 意味空間(言説空間)とは、本当は意味空間や概念図式とすら呼ぶことのできないものなのである。なぜなら「言説空間なるものが、それ自体として自律しているわけではな」く、「物質にも似た固有性と硬さを持って反復される一定の言説群の配列というほかない何か」であるから(遠藤[2006: 56-57])。

文献

- 遠藤知巳 (2006) 「言説分析とその困難(改訂版)：全体性／全域性の現在の位相をめぐって」 佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, 27-58.
- Luhmann, Niklas (1997) *Die Gesellschaft der Gesellschaft I*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. =(2009) 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹(訳)『社会の社会1』法政大学出版局.
- (1984) *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. =(1993) 佐藤勉(訳)『社会システム理論』恒星社厚生閣.
- 佐藤俊樹 (2005) 『桜が創った「日本」：ソメイヨシノ起源への旅』岩波新書.
- (2006) 「閥のありか：言説分析と『実証性』」 佐藤俊樹・友枝敏雄(編)『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂, :3-25.
- (2008) 『意味とシステム：ルーマンをめぐる理論社会学の探究』勁草書房.